

## 協働的問題解決による小学校社会科授業開発

末永琢也・關 浩和  
(兵庫教育大学附属小学校・兵庫教育大学)

## I. 問題の所在

現状の小学校社会科授業は、問題解決型授業が基盤となっているが、子ども自身の生活経験から逸脱しない個人的な問題解決に留まっている実践や社会の文脈から切り離された断片的な場面での問題解決に留まっている実践が多いのが課題である<sup>(1)</sup>。このような断片的で個人的な問題解決型授業では、現実の社会で適用できる知識とはならない。この課題を乗り越えるために、「協働的問題解決」型の社会科授業を提案する。これまでの学習は、教室という限られた範囲での子どもの学習経験や生活経験を基盤とした子ども同士の対話という相互作用による学びが中心である。そこで、学習問題や教材に関わる関係者との社会的相互作用を組み込んで、協働的な学びへと進化させる。これまでの社会科における問題解決の特徴を踏まえた上で、協働的問題解決による小学校社会科授業を開発することが本研究の目的である。

## II. 小学校社会科における問題解決の性格

先行研究の分析から小学校社会科における問題解決を「生活的問題解決型」と「社会的問題解決型」の2つに大別する。生活的問題解決型とは、子どもの生活の問題や課題を対象とし、その解決を図る問題解決学習である。いわゆる「初期社会科」といわれる日本の社会科創設期に実践されていた経験主義的な問題解決に代表される実践である。対象となる問題は、生活綴方による文章表現から抽出した子どもの直面している生活の具体的な問題を取り上げているので、子どもは切実感を持ち、自主的自発的な活動に向かうことができることに大きな特徴があるが、学習活動ばかりが着目され、子どもの表面的な活動に目を奪われ、質の高い社会認識形成に至らず、「這い回る社会科」と揶揄されている<sup>(2)</sup>。

次に、社会的問題解決型とは、分析的問題解決と創造的問題解決、協働的問題解決と3つに分類する。分析的問題解決とは、社会の機能やシステムを理解できるように社会から切り取った問題を設定し、問題解決の過程で社会の事実を理解していく問題解決学習である。これは、経験主義的社会科の問題解決から科学的社會認識の形成を意図した問題解決への転換を意図している。対象となる問題は、人間の行為や社会の時事的問題である。しかし、事実認識や子どもの生活経験の範囲内での常識的な社会認識形成に留まる可能性がある。創造的問題解決とは、社会的論争問題を取り上げ、その様々な解決策を模索しながら、より望ましい判断や選択をする問題解決学習である。事実認識に留まらず、様々な解決策を模索し、適切な社会的行為を選択できることが必要である。対象となるのは、対立する価値を含んだ問題、人々の意見が分かれるような問題などの社会的論争問題であるが、社会的論争問題という子どもに直接関わりのない高次元問題を対象とすることもあり、学習の中で子どもが有効な解決策を導き出すことや、社会の文脈にあった判断をすることができていない場合が多い。

## III. 協働的問題解決の性格による社会科授業

社会的問題解決型に分類される協働的問題解決とは、個人内の営みに限定せず、学習は、社会的・文化的なものであるという学習観を背景にし、「学習者が環境と関わりながら主体的に知識を構成していく」という状況的学習論の基盤となる社会的構成主義に依拠している<sup>(3)</sup>。対象とする問題は、社会システムの不備や限界から生まれた問題、住民との合意形成を必要とする問題である。前者は、社会システムの不備や限界によって生まれた問題を取り上げ、その解決への具体的な取り組み

表1 小学校社会科における問題解決の枠組み

	生活的問題解決型	社会的問題解決型		
		分析的問題解決	創造的問題解決	協働的問題解決
問題	子どもの生活の問題や課題	社会の機能やシステムを理解するために切り取られた問題	対立する価値を含んだ問題、人々の意見が分かれるような問題などの社会的論争問題	社会システムの不備や限界から生まれた問題、住民との合意形成を必要とする問題
人的環境構成	教師・子ども			教師・子ども・問題に関わる人
育成される力	・知識、技能、態度の同時的形成による人格形成 ・新しい民主主義社会の発展に積極的に貢献することのできる主体的な実践能力	・問題解決能力 ・学習意欲の向上 ・ものの見方・考え方の育成	・価値判断力 ・意思決定力 ・合意形成力	ジェネリックスキル ・合意形成力 ・コミュニケーション能力 ・ビジョン構想力 ・自己調整力 ・社会形成力
課題	・「活動あって思考なし」の這い回る社会科になる。 ・知識が現成的で子どもなりの理解に留まる。 ・時数がかかる。	・事実認識に留まる ・子どもの生活経験の範囲内の常識的な社会認識に留まる。 ・特定の価値の注入になる可能性がある。	・社会的論争問題が子どもになじみが薄い。 ・有効な解決策を導き出すことや、社会の文脈にあった判断をすることができるのか。	・予測不可能で、先が見通せない時代において、適切な問題設定やその問題に対する有効な解決策を導き出すのが難しい。

を対象とする。

後者は、住民として合意を得られにくい問題を住民の思いや願いを大切にしながら、粘り強く話し合いや交渉をし、納得のいくような折り合いをつけた事例を対象とする。つまり、対象とする問題そのものが協働での解決を必要とするものを設定する。これまでの協同学習では、教室内の異質の他者による相互作用が行われていたが、子どもの生活経験や既知から生まれる異質であり、教室内の最適解にしかならない。そこで、問題に関わる関係者という異質の他者との協働を組み込むで、教室内での閉じられた最適解ではなく、社会に開かれた最適解を生み出すことができ、よりよい社会や自己の生き方を創造していくことができる。

以上を踏まえ、小学校社会科における問題解決型授業の枠組みを示したのが表1である。

事業年度である令和2～3年度に、主に次の授業を開発している<sup>(4)</sup>。

第3学年単元「コンビニから見える社会」 第4学年単元「ごみから見える社会」 第5学年単元「日本の食料生産」 第6学年単元「大阪万博と日本」
--

#### IV. 研究の成果と課題

本研究の成果は、次の2点である。まず、これまでの小学校社会科授業の実践事例を収集し、問題解決学習の対象としている問題や人的環境構成、育成される能力などの視点から分析をするこ

とで、問題解決学習の特色や課題を明らかにして、枠組みを提示することができたことである。次に、協働的問題解決による小学校社会科授業開発をしたことである。教室内の教師と子どもの経験的で閉鎖的な最適解に留まらず、問題に関わる人を専門家として授業に参画していただき、協働で問題解決をするプロセスを経ることで、より社会に開かれた学びへと進化することができたことである。

今後の課題は、協働的問題解決を組み込んだ小学校社会科授業をさらに開発し、カリキュラムレベルで協働的問題解決の有効性を明らかにしていくことである。

#### 【註】

- (1) 關浩和(2018)「初等社会系教科教育の持続的研究のための課題と展望」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第30号, pp.3-10.
- (2) 田中耕治・水原克敏・三石初雄・西岡加名恵著(2005)『新しい時代の教育課程』有斐閣アルマ.
- (3) 状況的学習論や社会的構成主義に関しては、主に次の文献を参照されたい。Kenneth Gergen著・東村知子訳(2008)『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版.
- (4) 開発した事例は、兵庫教育大学附属小学校実践交流会や研究会において公開するとともに、授業動画も一部公開している。